



緑の架け橋

会報第34号(最終)
2019年09月30日
日中緑化交流基金助成事業
IFCCプロジェクト代表:佐藤晴男
協賛団体:NPO 法人アジアロード

固原市と内モンゴル2件(灤河源プロジェクト、蒙京津冀プロジェクト)の五期目の実施をもって、IFCC「日中の緑の架け橋を」事業は2002年開始から足掛け18年の事業を終えました。紙上をもって御礼申し上げます。

～大河の一滴が育まれることを祈念して～

寧夏・固原市事業実施地(西吉県)・五期記念植樹で、ボランティアの皆さんと(2019・5・10)



緑の架け橋の活動

2002年11月緑の架け橋推進センター設立し、その後推進母体の改編を行いながら足掛け18年を経ました。

これは日中緑化交流基金の助成を得た事業主催・IFCC国際友好文化センターの呼び掛けによるものです。

2008年11月、緑の架け橋推進センター解散。その後、「緑の架け橋」の活動は、事業主催のIFCC国際友好文化センターの下で「緑の架け橋プロジェクト」として継続され、2014年まで9つのプロジェクトを実施、終了。累積205人が参加。

2014年度(11月開始)から、NPOアジアロードを推進協賛団体として内モンゴル2ヶ所、寧夏回族自治区1ヶ所を開始。

3カ年計画が2017年で終了しましたが、2017年度四期目、五期(2018年11月～2019年10月)と継続し終了しました。

足かけ18年に及ぶ本事業が「大河の一滴」になることを祈念し御礼に代えます。

蒙京津冀プロジェクト 補植の後で記念写真(2019・7・26)



灤河源プロジェクト 第三期事業地で補植。請負農夫夫婦と(2019・7・27)



本プロジェクトは日中緑化交流基金助成事業の打ち切りに伴い、本会報も本号で最終となります。長年のご協力に感謝申し上げます。

IFCC 国際友好文化センター

〒162-0801 東京都新宿区山吹町333 辻ビル405
TEL.03-3268-4387 FAX.03-3268-6079

本会報は事業主催(IFCC)の植林プロジェクト特集号です。

18年間の日中緑化活動を振り返って/派遣団32回、2780haに植林

樹木の成育と仲間の笑顔を想う

IFCC 緑の架け橋プロジェクト代表
佐藤 晴男



<プロジェクト開始>

地球規模での温暖化現象は、中国大陸では沙漠化の進行及び大洪水の発生等で、動植物や人間の生活にも重大な影響をあたえていました。

全ての派遣団に参加しサポートしていただいた IFCC 北京事務所の劉憲良さんから終了にあたって挨拶を寄せて頂きました。

緑の友情

劉 憲良

2002年から2019年まで18年間かけて、「緑の架け橋」の日本の友人の皆さんは寧夏回族自治区、内モンゴル自治区多倫県と河北省遷西県で7,877,250本を植えました、



私は最初から参加し、緑の架け橋の参加者の友情と熱意とすくすく成長している木を目にしてきました。感心すると共に、佐藤晴男さんがいつも、中国の面積から見ると我々の木はわずかししか占めてないですが、点から線に、線から面になり、我々の力で日中友好と緑化活動を少しずつ広めましょうーと言っていたことが心に残っています。

長い間にわたって、植えられた木も大きくなって、地域環境が良くなっていることを見て、感動的な話もいっぱい思い出します。両国の国民の友情も木のように根を深く下ろすことだろうと信じております。心から感謝の気持ちをお贈りします。そしてもちろんわたしも、皆さんとの友情と植林のことを多くの人に伝えて行くだろうと思います。

これから、もっと木が大きくなり、もっと中日が仲良くなりますよう、そして「緑の架け橋」の参加の皆さんがご健康で、近い将来またお会いできるよう強く期待しています。中国へようこそ、楽しみ御待ちしております。

2019年8月6日

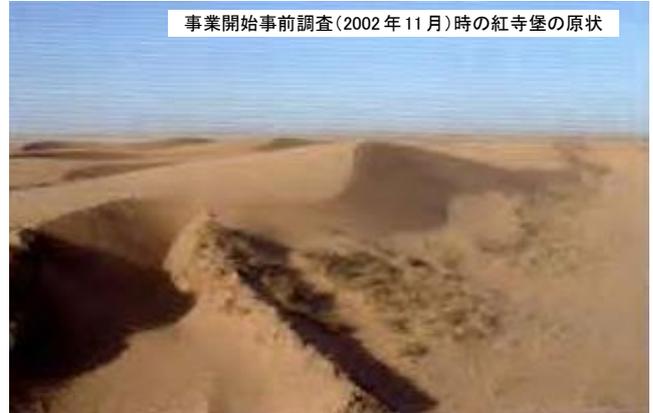
IFCC 北京事務所

1990年代、日中政府間で「日中民間緑化協力」として「日中緑化交流基金」が設置されていました。

そこで、中華全国青年連合会（全青連）から、長い間友好関係を持っていた IFCC 国際友好文化センターに対し、植林緑化事業への協力要請があり、友好関係を持つ労働組合の関係者等で、植林事業を推進する「緑の架け橋推進センター」を立ち上げ「緑化基金」の助成と中国側の「全青連」の協力と指導のもとに2002年から、活動に参加してきました。

実際の中国における植林地（プロジェクト開始時の寧夏回族自治区呉

事業開始事前調査（2002年11月）時の紅寺堡の原状



忠市紅寺堡区）は未知の世界でした。事前調査で ①現地
の沙漠の実態を知ること ②植物（樹木）が育つかどうか
③植林後の水管理等ができるかどうか ④共働事業とし
ての受け入れ体制ができるかどうか一等を調査しながら、一方で、それ以上に植林だけでなく、寧夏回族自治区（中国大陸）の歴史、文化を探索し、民間人としての友好、交流を進めること等も目標としてきました。

沙漠の未知は、自然環境が過酷なことを目のあたりにしさらに大きくなりましたが、それ以上に、そこで農作業し生活している地域の人達の粘り強さと困難な条件を乗り越えようとする熱い気持ち、及び行政一体となったバックアップ体制に圧倒されて、緑化事業参加を決意してきました。

植林活動は開始時の寧夏回族自治区で2019年まで続けられ、他に河北省遷西県、内モンゴル多倫県でも実施されました。2014年から始まった内モンゴル多倫県の事業はNPO 亜州道路を協賛団体として共同で実施されてきました。

<植林活動を振り返って>

今、地球規模で環境破壊が進行しています。中国での植林事業を通して、地球規模での温暖化防止をはじめ、生態系環境の改善、食糧の確保、貧困問題の解消、そして人的交流を通じた平和、友好を深めることーを目指しました。

温暖化の現状は酸性雨等が広範囲の干ばつ、局地的な大洪水、台風（ハリケーン）竜巻等を発生させて、人間をは

砂漠に出現した事業地「紅寺堡鎮」の街並/2012年4月



じめ、動植物の生態系にも大きな影響を与えています。

日本においても例外でなく、特に10年前までは黄砂の飛来は早春から梅雨時まで、長期間にわたり、飛来日数も多く、黄砂の量も時には、濃霧のごとくなり車の運転や日常生活にも影響する様なこともありました。これらは中国大陸からの偏西風に乗って飛来するもので、砂漠化が一層深刻になっている証左でもあります。

沙漠化の進行度合は、地球規模の温暖化、酸性雨、乱開発と森林の伐採等により、依然として拡大していると言われています。

荒廃した沙漠に植林（緑化）を行うことにより、黄砂の飛散と沙漠化を食い止め、地域の生態系の改善し、野菜、穀物、果樹等の栽培が可能になり、食糧確保と生活安定にもつながります。

もちろん、広大な中国大陸、広範な沙漠（砂漠）、過酷な自然環境の中で、私達の様な小さなボランティアだけではどうにもなりません、事業カウンターパートの全青連や寧夏回族自治区、河北省遷西県、内モンゴル多倫県の仲間、植林事業地の行政関係者、事業地域の住民の皆さんの植林緑化事業に対する熱い意志と積極性が大きな力になって足かけ18年間も続いてきたと言えます。

言葉は通じないですが、各地の全青連の若者、小学生から大学生、各層の社会人まで沙漠の中での共同作業は「生態緑化」にとどまらず、国境や歴史、文化を超越して、平和を享受し、友好を育むことができたと思います。

植林した樹木の成長と同様に「友好・交流」も両国にとって大きくなって欲しいものです

2002年の事前調査は県から足かけ18年間で、12事業地、2,780haで春期の植林と秋期の補植活動を行い、32回の派遣団には延べ272人の仲間が参加してきました。いつも全青連の仲間と地域の人達に励まされて、地域特産の料理を嗜みながら、交流と親睦を育んできました。

信号機も見られる「紅寺堡鎮」の街/2019年5月



ある時には、日本と中国の首脳政治家段階では、靖国参拝や歴史教科書問題、尖閣列島（領土）問題等で、交流に危惧や心配も懸念されましたが、現地の仲間は心よく迎え入れて、これらを払拭する様な熱烈歓迎の中で植林の共働作業を実施、まさに民間の友好交流が定着する姿でした。

また、この間以下のようなこともありました。

- ・2003年の第1次派遣団は猛威をふるったSARS禍のため延期となり、少数で進捗調査に出向きました。
- ・2006年4月の第5次派遣団には大分テレビクルーが同行しドキュメンタリーを製作しました。
- ・2009年9月の第12次派遣団には村山富市・元総理大



村山富市・元総理大臣を囲む地元の学生たち/2009年9月

臣も参加いただきました。

- ・2011年、2012年実施の寧夏・石嘴山市恵農区プロジェクトは2013年の黄河流域大洪水で事業地が水没で破壊され流出してしまいました。
- ・2012年9月の第18次派遣団は日中間の政治状況が悪化し中止となりました。

<御礼に代えて>

緑の架け橋推薦センターとしてスタートしIFCC緑の架け橋プロジェクトとして継続してきました中国緑化植林事業の収束にあたり、わたしたちの活動は初期の目的からの評価はいかになるでしょうか。

植林した樹木は確実に成長して、沙漠の中では「点」にすぎなかった樹木が、林から森へと「面」に拡大され着実に育まれており、寧夏回族自治区の数ヶ所の事業地では沙漠地だったところが居住環境整備されるなどすばらしい成果が見られます。もちろん、広大な中国大陸の中では、成果を語るほどでもない事業かもしれませんが、現地の人達や「全青連」の仲間の笑顔をおぼろげに忘れられません。

日本の「日中緑化基金」、中国の中央及び地方の「全青連」、現地の住民や青年学生人達、そして企画から実行計画まで唯一すべての植林活動に参加し協働いただいたIFCC北京事務所の劉憲良さん、IFCC鎌田さん、そしてこの計画に参加いただいた中央、地方の関係者の皆さんに紙面にてお礼申し上げます。

(元・緑の架け橋推進センター会長)

思い起こされる37人参加した第一次派遣団(紅寺堡鎮/2004年4月)



寧夏回族自治区で足かけ 18 年の植林活動

寧夏で最後の植林プロジェクト（固原）を終える

宮秋 道男

今回で最後になるという寧夏自治区固原市での植林事業。昨年と同じ顔ぶれで現地を訪れた。今回の目的は、①開始時の事業地視察、②寧夏自治区北部の事業地視察であったが、同時に、佐藤晴男団長含め団としては、これまでの寧夏での 18 年間の事業に関係した方がたとの振り返りの意味もあった。

最初に向かったのは第 5 期の事業地（月亮山）であった。現地では、記念植樹をするということもあって、20 名ほどのボランティアの方がたが待っていてくれた。日本の感覚では、いわゆる禿山（はげやま）とっていいのだろう、あたり一面、山肌が露出しており、そこで植林事業が行われているのだ。私たちが案内されたのはほぼ頂上部であるので、吹き曝しで風も強かったが、長年の経験からか、セレモニー的な植林も、要領よく、あっという間に、50 本程度の苗木を植えることができた。佐藤団長があいさつに立った。「ささやかな協力かもしれないが、お国の緑化の役にたつことをうれしく思う。同時に、我々日本人がみなさんと、緑を通じてつながりができることを願っている」という趣旨の発言をされていたが、感動的であった。



原点の紅寺堡第二期の記念碑と生い茂る木々の前で

これまでの事業地（紅寺堡プロジェクト/2002 年度～2004 年度、平羅県プロジェクト/2004 年度～2006 年度）も保育状況視察で訪れた。この植林事業開始時の事業地ですでに 10 数年を経ているわけだが、その変わりように、

いずれも驚きの声が上がっていた。木々が生い茂り、しっかりと森といえるような地になっていたので。また、平羅県ではさらにすすめて環境保全地域として動植物の復元をめざした地域に生まれ変わっているところもあった。それは「なんとか砂漠化防止」という受け身ではなく、環境保全するという積極的な取り組みになってきたということか。

そのことを象徴するように、今回、当該の事業地訪問とともに、現地の「新たな力」ということで、ワイン用のぶどうづくりも盛んになっているようで、その工場・ワイナ



寧夏の青年団の歴代担当者が集まってくれた

リー見学も寸暇を縫って行った。そもそも「枸杞」（クコ）という実では、中国全土に有名なこの地で、ワイン用のぶどう栽培が始まっているのだ。ワイナリー建設も行われ、すでに出荷もしているとのことだったが、環境的には、当然といえば当然なのかもしれない。

団長の佐藤晴男さんは、この事業を一貫してフォローし、訪問の際には毎回参加されていたそうだが、事業がすべて終了するというので、佐藤さんの思いはいかになものでしょうか。と内心、危惧していたが、その危惧を吹き飛ばすごとく、現地では多くの方がたが、佐藤団長に会いたくて集まってきた。その姿は感動ものだった。団長のいう。「緑が人と人をつなげてくれる」という思いが具体的な形で現れた姿を見る思いだった。

(NPO アジアンロード理事長)

【2019 固原市プロジェクト派遣団 行程】

寧夏の事業地を巡り、成果を確かめる

【5 月 09 日】羽田～北京～銀川～固原

・羽田空港から中国国際航空 (CA) にて北京へ。国内線に乗り換え空路、銀川へ。銀川空港に寧夏自治区青年連合会の温皓・部長が出迎えてくれた。固原行き国内線に乗り換え予定だったが恒例の遅延で固原の六盤山空港には 12:05 ごろ着いた。固原行きのフライトは重慶まで行くようでその変貌ぶりは目を見張る。寧夏内で国内線に乗るのは 18 年間で初めての体験で植林開始時からすると隔世の感だ。銀川空港も前年より大幅に拡充され、

フライトも増えた。

・固原の六盤山空港では固原市青年連合会の出迎えを受け、市内ホテルへ。12:40 ごろホテル着。2017 泊の固原瑞豊国際飯店

【5 月 10 日】原州区（市内）～西吉県～六盤山

・09:30 にホテル発で事業地（西吉県）に移動。1 時間くらいと思ったが、2h はかかった。11:30 ごろ現地に着く。
・記念碑は不要と事前に連絡したので開工式のみ。現地作業員が 15 人ほど。ボランティアが 20 人ほど。西吉県青年団副書記・馬小龍の司会で西吉県副県長が挨拶。固原市青年団の副書記の穆小平

- 氏も列席。第五期事業地（月亮山）で記念植林。
- ・記念植樹終え 12:30 ごろ帰途へ。昼食会場が遠い。1



宁夏で最後の起耕式／第五期事業地で

- 時間くらいで観光地として造成した西吉県美景村に着く。どうしても西吉県を見せたいという事らしい。昼食後、施設見学に誘われ 15:00 を過ぎてしまった。結局、事業地一期～三期保育状況視察はパスせざるを得なくなった。
- ・それから原州区の南に位置する隆徳県の六盤山に行く。森林公園とは異なる場所らしい。原州区（市内）に戻らずに向う。ここでも 2h 要した。
- ・かつての長征の歴史地区にある六盤山紅軍長征記念館だった。麓から敷地内電動バスに乗り換え、まだ残雪の



固原市ともお別れの為、「長征」縁の六盤山を訪れた

残る博物館入り口まで登る。館内見学は小1時間。閉館の18:30

- までいた。寒い。
- ・館のスタッフも一緒に電動バスに乗り下山。若者が多いが麓にはスタッフ用駐車場があり域内バスを降りたスタッフはそれぞれの自家用車で帰宅らしい。現在の中国文化の一端をみた。とにかく、発展はすごい。
- ・ちなみに六盤山はチンギスハン逝去の地としても歴史に刻まれている。
- ・18:30 固原市内に向かう。21:40 ごろホテル着で固原市青年団の王書記も参加しホテルで夕食をとる。

【5月11日】固原～呉忠市（紅寺堡）～銀川

- ・08:55 ごろホテル発で呉忠市紅寺堡開發区の事業地に向かう。西安から中衛市まで高速鉄道が通るらしい。車窓から鉄道施設工事模様も垣間見える。
- ・12:20 ごろ現地につく。呉忠市青年団副書記の馬さん、紅寺堡開發区副区長らも駆けつけている。寧夏・紅寺堡生態緑化プロジェクト事業地（呉忠市）保育状況視察する。
- ・わたしたちが最初に手がけた植林事業地は全面砂漠であったが現在 23 万人の街となっている。繁る緑の木々を嬉しく思う反面、この水は黄河から引き水していると聴き複雑な思いだ。黄河下流域の渇水も社会問題化して

- いると聞くがその流域は雨水も多いとの言い訳だった。
- ・定点観測地も再開発で風景画変貌しており残念だったが、植林跡地と痕跡をなんとか残そうとの気持ちには汲み取れた。
- ・この地は 2002 年 11 月に事前調査に訪れてから足掛け 18 年となっており、ひと昔で当時のことを知る人もほとんどいない。
- ・昼食後 14:00 ごろ銀川に向かう。途中、紅寺堡開發区の發展状況を見せたいと地元産のぶどうを使ったワイナリーを見学し、紅寺堡をあとにする。
- ・途中、もう 1 軒、地元が自信を持つワイナリーに案内された。ここは呉忠市内に近い。政府要人も訪れたところらしい。確かに味は良

- かった。
- ・紅寺堡から 3h 以上要し 17:30 ごろ西夏王陵に着く。2 年前より手が増えられていた。案内バスは博物館直行ではなく西夏王陵をとりまく一帯をぐるりと一周するかたちで博物館前に着いた。これははじめての経験で王陵一帯の様子が解説付きで案内された。
- ・博物館はあいにく改装中で見ることができなかった。博物館となりの古民家施設は観光用に整備され敷地内も拡充されていた。
- ・王陵見学し 18:30 ごろ銀川市内に向かう。
- ・銀川で青年連合会と総括会議の予定だったが、旧交を温めての懇親会となった。寧夏自治区青年団副書記の石楊さんは子供づれで参加。青年企業家協会の王利宏さん、以前の担当者だった宋さん（現、寧夏自治区共産党弁公室主任）、葉さん（元・青年団部長、現・保険会社社長）も参加し総括のための懇親の場となった。
- ・佐藤さんの挨拶は親しみを込めたものであったが「18 年間の植林活動の最後としては少し寂しいのではないか」という辛口も交えたものだった。「井戸を掘った人の事を忘れない」という故事からするといろいろ想いが巡る。しかし、それにも増して青年連合の若者たちが業



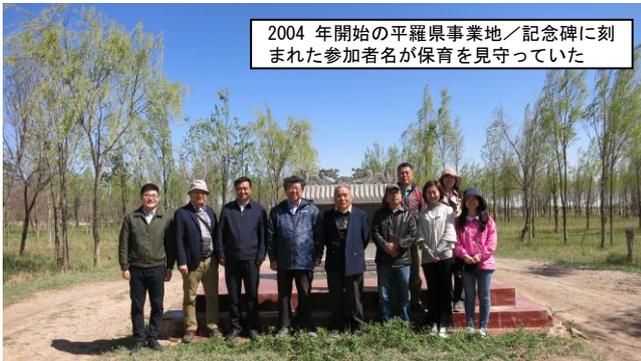
2004 年に作られた紅寺堡事業地記念碑／木々は補植されている

- 務として植林事業にかかわったことからすると、多くの旧知の人が懇親会に顔出してくれたことは、団のメンバーの宮秋さんによると「感動もの」だそうだ。
- ・宮秋さん、木原さんは前年銀川泊がなく今回初めて。もちろん西夏王陵も初めてであった。
- ・21:10 終了しホテル悦海賓館へ。村山富市・元総理が泊

まった 2009 年は砂漠になかに建てられたようなイメージであったが今は周辺も発展し新市街として隔世の感がある。

【5月12日】銀川～石嘴山市平羅県～北京

・石嘴山市平羅県プロジェクトの保育状況視察に向かう。



2004年開始の平羅県事業地/記念碑に刻まれた参加者名が保育を見守っていた



黄河沿いの平羅県事業地は資料館が設置され大きな自然保護区となっていた

この事業地は紅寺堡プロジェクト終了（3か年）を受け2004年から開始された事業地。

- ・2h 要し 10:30 平羅県事業地に着く。黄河沿いの事業地跡は良く保存されており今回会うことはかなわなかったが当時の女性担当者の熱心が偲ばれる。
- ・事業地入り口で平羅県長に出迎え頂き、植林活動の全体模様と木々や花の自生状況、野鳥や小動物の状況など展示した会館が作られており案内頂いた。嬉しい思いだ。
- ・事業地にあった全体を見渡す小さな塔は朽ちてはいたが今も立っておりなつかしい。その下には当時のままの記念碑が残っており、日本から参加した植林団メンバーの氏名が記載されていた。
- ・事業地によってその後の保育への熱意に差があり、保育状態が違う。難しいものだ。
- ・10:30 ころ事業地から引き返し、現地の青年団がどうしても見てほしいという「賀覧山古代壁画跡」の見学に行く。11:30 ころ着いて見学。最近、雪も降ったとかで寒い。寧夏が世界に誇る世界遺産とかで一見の価値はあった。
- ・13:50 賀覧山をあとにし、市内に向かう。昼食は遅く14:30 から。温さんも顔を出す。希望していた寧夏回族自治区博物館は今回も時間がなく見学できず心残りだった。
- ・旧市街の中心にある「寧夏の故宮広場」に立ち寄り17:15 空港着。19:10 のフライトで北京に向かう。
- ・21:05 北京着。時間通りだ。しかし、荷物ピックアップ

2019年植林と草原の風にふれる旅/内モンゴル

友情は終わらない

奈良 吉元 富士男

昨年に引き続き二回目の参加となりました。今回が最終回という事で残念です。私は植林というテーマよりも農業関係について参考になればと参加させていただいております。

まず多倫第一日目に「多倫県での緑化事業の総括会議」がありました。

多倫における植林の問題点・対策について

- 1 干ばつ対策～補植する
- 2 防寒、暴風対策～補植する
- 3 動物対策～補植する
- 4 防虫、防病対策～農薬散布

という説明があり、農業と同様の問題点があることが分かりました。農業では人の知が大きく左右する傾向ですが、植林については多大に自然任せであることが分かり現地での植林の困難さが理解できました。

さて私としては夜の会議に重点をおいておりますので、今回はゲル民泊先でマジックショーを開催しようと用意していたところ、宮秋団長の命により多倫二日目の夕食会にも実演することとなり、「日中植林友好第一回マジックショー」を開催しました。観客の方々の大声援と感動と共に美酒美食となりました。

そしてゲル民泊にて、本番の「日本モンゴル友好大マジックショー」を開催し大いに盛り上がった後、さらに昨年に引き続き「第二回モンゴル日本友好故郷歌合戦」が開催される運びとなりました。今回は第1部、第2部と長時間にわたり内モンゴルの夜空に大きな歌声が響き渡っていました。

最後に、北京での国際青年中心の方々との会談がお別れ会となったわけですが、その席での国際青年中心主席の方の言葉を引用させていただきます。

「プロジェクトは終わっても私達の友情は終わらない」
お世話になった皆様方とどうか又友情を分かち合う事ができますように。

(奈良県曾大根地区農家組合長)

し市内に向かうが日曜日にかかわらず市内行きは渋滞は甚だしい。22:30 ころ二十一世紀飯店に着く。遅かったが恒例の反省会を行う。

【5月13日】北京～羽田

- ・植林事業のカウンターパート中国全青連・国際青年交流センターの担当者たちも何かと多忙のようで、昼に会う予定が朝食での挨拶となった。08:30～09:30。洪桂梅センター副主任。植林最終年としては少し寂しい挨拶だった。
- ・11:30 に北京空港に向かう。復路は時間通りで15:40 のフライトで20:00 ころ羽田に着く。

(記：IFCC 理事長 鎌田篤則)



視察概要報告

「中国青年灤河源生態緑化モデル林事業」・「蒙京津冀青少年生態緑化モデル林事業プロジェクト」

実施期間－2019年7月25日から30日まで
北海道－杉村 政彦

7月25日(木)

【早朝】羽田空港国際線ターミナルで今回の視察に参加されるIFCCの鎌田篤則理事長、特定非営利活動法人アジアロードの宮秋道男理事長・木原勇副理事長と一般参加の虎谷正博・伊藤聡志・杉村政彦(林野庁北海道森林管理局職員及びOB)が合流。

個人的には、2年前にも参加しており今プロジェクトが最終年を迎えることから再び訪れたいとの思いがあった。

仕事柄、脊梁山地や奥地水源地域の森林を担当するため森林に分け入ることは“山を登る”こととは同義語であり、日常となっている。中国多倫県では、小さな丘陵を含めた砂漠と草原。足元は、枯れ葉等が朽ちた腐葉層などの有機物を含む表土が全くない砂地。わずかばかりの下生えがあるのみ。降雨量をはじめ、気象条件も地形も全く異なる非日常の対極的な環境で、森林を育むことの意味を考えてみたかった。

【夏休み】シーズン到来の影響もあってか羽田国際線ターミナルは混雑しており、航空会社もまとめて取れず2社に分かれて同時刻9時5分に離陸。

北京首都国際空港では、関西空港発の吉元富士男さんと合流し一行7名全員が揃う。滞在中同行してくれる、中国国際青少年交流中心の劉宇紅さんに出迎えていただいた。同じく同行していただく劉憲良IFCC北京事務局長は「事前準備のため一足早く、多倫県に前入りしている」とのこと。

15時頃仕立てていただいたマイクロバスにて、気温36度の北京市を出発。2年前と比較して道路標識・案内標識が整備され交通環境が進んだことを車窓から確認できた。

多倫県に到着後、20時40分から夕食を兼ねた歓迎会が行われた。〇〇秘書長より盛大な歓迎を受けた。

7月26日(金)

【9時20分】より「中国青年灤河源生態緑化モデル林事業」・「蒙京津冀青少年生態緑化モデル林事業プロジェクト」の総括会議が行われた。場所は、日本的に言えば“官庁の合同庁舎”、多倫県司法局・水利局フロアの会議室で行われた。

冒頭、鎌田事務局長より日本側視察団員の紹介。宮秋団長は、プロジェクトの立ち上げ段階・事前調査時を振り返りつつ「私たちの5カ年のプロジェクトが最終年を迎えた。一抹の寂しさもあるが、大きな成果を得たと自負している。中国側の壮大な植林計画の中で私たちのプロジェクトは、その一部を担ったに過ぎないが植林をつうじて日中友好に貢献してきた」「2事業地合計で、60万本の植林成果をあげた。面積に換算すると東京都の300倍にあたる。最終年度の事業計画や進捗状況を伺いながら意見交換を

行いたい」とあいさつを行った。

内モンゴル共青团發展金秘書長は「2008年以来、日本

車窓から広大な植林の跡をみる



側小淵基金事務局の支援・援助のもと、全青連・共青团・多倫県が主体となり緑化プロジェクトを進め今日に至った。その一環であるIFCCの事業に心より感謝申し上げる」と述べられた。続いて〇〇林業局主任より2件のモデル林事業プロジェクトの詳細な経過説明を受けた。質疑の回答を含め概要は以下のとおりである。

1. 実施団体は、共青团内モンゴル、内モンゴル青少年生態發展基地、内モンゴル・多倫県政府(林業局)の共同で進めてきた。
2. 事業地である多倫県は、北京と天津の水源である灤(ラン)河の源であること。同時に黄砂の発生源であり、砂

苗畑視察



漠化防止エリアに指定されている。従って、①緑化・植樹を行うことで土壌を保持させ黄砂を防ぐこと。②北京市に隣接していることから砂漠化の南進の防御線であり、森林(植生)の被覆率を高め、環境改善・スモッグ対策の効果を上げること等をおもな目的としている。これらの背景と施策をつうじて「多倫県は、森林都市をめざしている」と語られた。

3. 緑化(造林)の基本計画として多倫県において「障子

松（モンゴルアカマツ）100万畝（約6.67万ha）植林基地計画」が策定され達成されている。本モデル林事業プロジェクトは、5カ年にわたり、その緑化の一翼を担ってきた。

体的には、

- ①将来、森林の機能・役割が十分に発揮できるよう事前計画に心掛けている。
- ②2015年から2018年までの4年間で300万円を投資し、生態林（人工造林）2,000畝を造成してきた。
- ③植林（造林）では国内基準を上回る70%の活着率で行っている。乾燥害・寒風害が苗木の活着を低下させる主たる要因であることから、植栽後5年間の保育を重要視している。管理（保育）では、積極的に補植を行っている。専門技術員の指導のもと、経験豊富な施工（造林）チームに委託をしている。
- ④共青团・林業局が協力し、防火（山火事予消防）体制の構築している。「病虫害報告制度」を設け農薬散布などを専任技術員が除草・灌漑・施肥を含めて実施している。中国国内法に基づき無断伐採を禁止し、羊などの家畜の放牧も事前計画に取り入れている。



4. モデル林事業プロジェクトの成果は緑化（造林）面積の拡大ばかりではなく、中国国内の幅広い青年組織が参画することで、環境緑化意識が向上し植林基地建設への理解が広まったこと。同時に青少年の生態回復等の教育にも寄与し、緑化環境意識を向上させることにつながり、ひいては日中の青年交流をつうじ友好が深められた。

つまり、植林・緑化が直接の成果として生態の改善・向上に役立ったばかりでなく、住民の環境意識の高まり等の社会的な成果ももたらしていると「二面の成果」が強調されていた。

以上の説明と合わせ、プロジェクターを用いて位置図及びプロジェクト現地の緑化前後の比較写真や実施年度ごとのボランティアを含めた植林作業風景等について説明を受け意見交換を行った。

12時10分、「100万畝植林基地」を遠望できるパノラマ地点（小高い展望地）に移動した。麓から丘に連なる地形が幾重にも広がる大地に、障子松の一大人工林がパッチワーク状に造成されていた。若齢の生育途上の人工林とはいえ、将来に期待できる森林造成に確かな手応えを感じた。

12時45分、苗畑視察。苗床が整然と並び、除草も行きとどき人手が掛けられているのがハッキリとわかるのが第一印象。障子松は払出した後との事で、苗床には雲杉（チ

ユウゴクハリモミ）が育苗されていた。2年生の平均苗長14cmから4年生の40cmを中心とする苗畑で、内モンゴル青少年生態発展基地の職員が管理経営を行い、販売収入を得ていると説明を受けた。

北海道の多くの苗畑が苗床を栄養豊富な土壌で盛り土を行うことで一段高くなっていることにに対し、現地は平らな畑であった。日本的な苗畑経営上の土壌改良には至っていないが、砂質土である土壌の違いと樹種の特性を踏まえた、経験則に基づく合理性があるのだろうと見入った。その分、地下水を利用した灌水に気を配っている様子が窺えた。

お昼をいただいた後15時30分より「蒙京津冀青少年生態緑化モデル林事業プロジェクト」の2016年実施の第2期事業地を視察した。砂地上に草が繁茂し初期植生が回復しつつあること、明渠内に植栽した障子松が順調に育成している姿に、造林者たちの労苦に敬意を表する思いを一層強くした。

現地ボランティア8名とともに障子松（5年生・苗長110～120cm）30本を記念植樹した。何気に見るとバッタがおり、その昆虫を補食する鳥類も少ないとはいえ観察でき、生物多様性も少しづつではあるが、ゆたかになっていることも実感できた。

17時50分、「青少年生態実践基地」内の展示施設建設現場を視察した。大型建設機械で土地造成をする初期工事であった。今後の計画では人造湖・キャンプ場も建設すること。広大な大地に壮大な計画、GDP世界第2位の経済力の成せる技を相反する思いを持って眺めてきた。

7月27日（土）

10時30分より「中国青年灤河源生態緑化モデル林事業」の第1期から第4期までの事業地を視察。起伏の少ない草原の地形に、1本の帯内に6列から最大10列の植栽列を成し障子松が整然と植えられている。この1本の帯の幅がおおよそ9m～18m。その帯が何本も延々と続く光景は圧巻であった。

現地林業局の説明からすると、障子松の植栽本数は1ヘクタールあたり1,665本である。例示として、北海道国有林の類似樹種カラマツを植栽する場合は、1ヘクタールあたり2,500本を基準本数としている。あくまでも上限が2,500本であり、植栽する場所に生えている樹木の具合や邪魔になる笹などの繁茂の濃淡、植栽箇所の傾斜、苗木の間隔、1列植えにするか2列植えにするか等々によりマイナス補正し、植栽本数を導き出す。帯は、1帯3m幅で、その中に2列で植付ける。その帯の左右両隣に将来の間伐に備えて、4mの残し幅を設ける。

北海道は、我が国の森林面積の22%を占め、比較的大面積で林業を行ってきた歴史がある。その北海道でも、前述が最もスタンダードな仕様である。帯幅の規模の違い、植栽列数の相違をお分かりいただけると思う。

14時30分より遅めの昼食を取り、林業を営む農家を訪ねた。

羊などの放牧の結果、砂漠化した土地に入植したのが1年前とのこと。農地は国家の所有であるが、政府と70年間の利用権契約を結び、800畝（約53ヘクタール）を自ら多様な樹種を植林するだけでなく、販売用の苗木も生

産している。雲杉などの針葉樹の他、ヤナギや果実を収穫できる杏子（アンズ）などを実生から育て、苗木業者に売り払い収入を得ている。併せて政府からの補助金が年間



漯河源プロジェクト三期目の請負農家の奥さん

4,000 元支給されるとのこと。夫は公務員で町場に離れて住み、妻ひとりが専業で担っている。

2年前の訪問でも「雲杉は、障子松の倍の値段になる」と言われていたが、より単価の高い樹種への転換や高付加価値の果樹木（苗木）を流通商品作物として位置づけている。つまり政策的誘導として、補助金支給の一方、農家（林家）の就労意欲と所得向上をめざした経済の好循環を意図している。

日本国内の農山村が様々な要因により疲弊しているが、中山間地農家への所得保障と生産物の特化や付加価値向上を図る政策と基本的には何ら変わらない取り組みが、社会主義と資本主義の体制の違いを乗り越えて行われていることに感じ入った。

これらの「中国青年漯河源生態緑化モデル林事業」・「蒙京津冀青少年生態緑化モデル林事業プロジェクト」の植林現地を視察し2年前と比較し感じたことは、第1に総じて徐々に草本類が繁茂・活着している印象を強くした。試しにスコップで植生を掘り返したところ根が縦横方向に伸びていた。砂質土をグリップ（固砂）していることの一例である。第2に、推察するに2年前は季節風による砂嵐に負けまいと「深植え」になる結果、根系が酸素不足で枯死している植栽苗木が散見されたが、今回は見られなかった。説明どおり補植が徹底されていることの証左といえる。現場技術者の努力を賞賛したい。第3に少しずつではあるが生態系が、ゆたかになっていると思われる。前回見られなかった、昆虫や鳥類が観察できた。全体を断言することはおこがましいが、局地的にせよ砂漠が草原化し遷移がゆっくりと進行していると感じられた。

補足として、一部だが植林時の苗木の根を包んできたポリ袋がいくつも無造作に捨てられ散乱していた。生態系の改善方向に人間の意識もせめて同調せねば、一時的な植林・緑化の成果も保持できないであろう。

7月28日(日)

ゲル民泊体験コースと多倫見学コースのそれぞれに分かれ、体験・観光を楽しんだ。

牧民宅ファームステイでは、持参した日本蕎麦を堪能し

つつ歌や踊りで友好交流が深まった。

観光見学は、モンゴル帝国を築いた元朝・チンギスハンの夏宮である上都に足を運び、世界文化遺産の上都遺跡と上都博物館、チベット仏教の名刹彙宗寺を見学した。

7月29日(月)

11時に合流し全体で北京に向け移動。宿泊先である21世紀飯店に到着し、18時30分より本プロジェクトのカウンターパートであり永年の友人である中国国際青年交流中心の馬光民主任・洪副主任・王部長と会談。

日本側からは宮秋団長が挨拶に立ち、今回の現地視察を踏まえた5カ年にわたるプロジェクトの実行結果と成果が報告された。「プロジェクトは終了するが、我々の友情は終わらない」と挨拶が結ばれた。

馬主任は「内モンゴル多倫県で大きな成果を上げたことに感謝する。今月、内モンゴルオルドス市において砂漠化防止国際フォーラムを開催したばかり。砂漠化対策、植林・緑化への多大な貢献へ重ねて感謝する」と成果と貢献が強調された。

最後に、所期の目的を果たし全日事故なく無事終了することができた。現地青年連合会・共青团・林業局の関係者の手厚い歓迎は、日中友好の意義とともに参加者の一生の思い出になったであろう。併せて、生態環境が極めて脆弱な砂漠地帯を植林・緑化する必要を参加者一同で共有することができた。

2014年度時点、中国の砂漠化土地の面積は約261.16万平方kmであり国土面積の約27%を占めるといわれている。日本の国土面積が約37.8万平方kmであるから、今年2019年をもってプロジェクトは最終を迎えるが、宮秋団



カウンターパート国際青年交流センターの皆さんと（北京・2019/7/29）

長曰く“私たちの取り組みは、大河の一滴・砂漠の一粒にも満たないが、大きな誇りであることを確信した6日間であった。

また思い掛けないエピソードとして、ゲル民泊体験の牧民宅ファームステイ先のお嬢さんが北京林業大学に進学したと宮秋団長から知らされた。2年前の民泊時、背が高くスマートな印象と、はにかんだ表情が愛くるしい女性が森林・林業を専攻している。中国国内で飛躍的に拡大が進む人工林の持続可能な森林経営をめざし、若い技術者の誕生にエールを送りたい。手前勝手ではあるがこのプロジェクトが礎となり、中国における森林・林業の発展に寄与・貢献していただくことを心から切に願う。

IFCC 交際友好文化センター鎌田篤則事務局長、団長を快く引き受けていただいた宮秋道男さん、各種の手配等並

びに通訳を務めていただいた劉憲良さん・刘宇紅さんに紙上をお借りして心からの御礼を申し上げます。

まず、はじめに楽しく劇的な視察の旅を引率して頂きました宮秋団長他、同行の皆様にご感謝を申し上げます。

(北海道・双珠別森林事務所 首席森林官)

【レポート】蒙京津冀青少年生態緑化モデル林プロジェクト 初めての砂漠緑化体験—大草原の一大造林地に感動

伊藤 聡志

IFCC 緑の架け橋プロジェクトについて杉村さんから熱いプレゼンを半年程受けてはいたのですが、覚悟が決まらず決心したのは期限ギリギリ旅立つ3ヶ月前である4月末

日のことでした。今回、参加するにあたって植栽樹種の特性・用途、過去の「緑の架け橋」報告や砂漠緑化事業について事前学習をした上で参加しました

が、これまでの自分の中で培ってきた経験が通用しない出来事ばかりでした。想像してたものと違ったものやカルチャーショックを受けたことを中心に記したいと思います。

最初に受けた印象としては、北京から多倫までの道中や多倫県全域的に植林が大規模に進められていることでした。草原が見渡す限り広がっており、土むき出しの荒廃した土地も少なく、植林地を回っている際にはチョウやバツ



蒙京津冀青少年生態緑化実践基地記念塔の前で

タといった虫が見つけれその点は北海道と同等と感じましたが、ひとえにスコップをとっても違い、長い柄のついた槍のようなスコップは地面を「掘る」というイメージより地面を「突く」というイメージが近く、新鮮に感じました。北海道の造林仕様は2条植えの5倍の10条植えの造林地は圧巻の規模でした。特に印象的だったのは植栽方法です。苗木1本ずつに堤防を作りダムの中で水分を蓄えながら生長をうながす方法は苗木が根腐れを起こす為、日本ではまずしません。他にも簡易的な用水路の中に植栽していたり、ホースを張り巡らし散水していたりと年間降水量の少ない土地ならではの造林技術が定着してました。

総括会議時の説明を受けた後、蒙京津冀青少年生態緑化モデル林プロジェクトの第五期現地を見学し、植樹体験を通して規模が北海道と違い過ぎて想像すら出来ないことばかりでしたが、100万ム一植林を完了し、さらに100万ム一植林と大規模造林の計画は聞くことが出来ました。今後の施業については特に聞くことが出来ず、植えて終わりなのか、今後の管理経営はどうなるのか、といった疑問が湧きました。

最後に、時間があつという間に過ぎていき充実した5日間となり、参加出来て良かったというのが率直な感想です。雨が降れば文句を言い、虹が出たら一生懸命写真を撮り、白酒に悲鳴を上げ、過ぎゆく万里の長城を目に焼き付ける、といった五感をフルに研ぎ澄ました行動は旅なら

ではと感じました。何年か、何十年か経った際にまた植栽箇所を再確認したいと思いました。今回、参加して見て、感じた経験を糧にし今後の活動に活かし

ていきたいと思っています。

(北海道・双珠別森林事務所)

【レポート】日中青年灤河源生態緑化モデル林事業

今後の森林造成のために弛まぬ努力を

虎谷 正博

IFCC の鎌田さんから、誘いを受けて4年目、同行した杉村さんからの声かけもあって参加を決断した。

北京から現地に入って3日目、午前中にモデル林事業の2018年に樟子松を改植した箇所の視察と苗畑見学、午後から改植作業を実施。多倫の市街から現場まで40分程度で到着するとの説明であったが、凍結などによる道路の補修が進んでおらず悪路のため現地到着まで2時間もかかった。帰り道は、遠回りではあったが、快適な道で1時間程度で戻れた。もう少し効率よく出来ないものかと感じた。

視察した箇所は、2017年4・5月の雨量が多い時期に植栽したがその年は極端に雨量が少なく同年1月に補植するも活着率が悪く、2018年に改植した箇所との事。改植した苗木が2017年の植栽木から比較して小さめだったので、どうしてなのかと質問。補植後に灌水し30日程水分がたもてるため活着率を高められるとの事。補植した苗木は、枯れているものもあったが活着率を高める工夫や努力がされていた。

私見ではあるが植栽木の活着率向上の為には、日本と違って、年間雨量が400mm程度で有り、極端に雨量が少ない場合などは活着率の低下につながる可能性があり、そのような年は、植栽を見送る判断もあっても良いのではと思う。日本でも秋植えを行うが、春先には根踏み等作業など凍結により根が浮き上がるのを防ぎ活着率を高める作業があるが経費が掛かり増しになる短所がある。この様なことを考慮すれば、雨量が多い適期に植栽することが活着率を上げる条件であり、苗木の大きさに差が生じるのであればそのような工夫があっても良いのでは無いか。

植栽・補植用の苗木は、ポット苗が用いられていた。日

農家請負の事業地は心配だったがむしろ保育がしっかりしていた



2019年度(26次)派遣団参加者		
佐藤 晴男	固原市	IFCCプロジェクト代表
宮秋 道男	固原市・多倫県	NPO 亞洲道路
木原 勇	固原市・多倫県	NPO 亞洲道路
吉元 富士男	多倫県	奈良
杉村 政彦	多倫県	北海道
虎谷 正博	多倫県	北海道
伊藤 聡志	多倫県	北海道
鎌田 篤則	固原市・多倫県	IFCC
劉 憲良	固原市・多倫県	IFCC 北京事務所

本でも用いられている。根の発育が良く、植栽木の成長や活着率が良い利点がある。

現地の樟子松の成長が良いのには驚いた。日本のカラマツも成長が早い、山出しまで3年、下刈りなどの保育作業が終了し1回目の間伐までに14・5年は掛かる。現地の植栽して4年目になる木は、2～3m位に成長しており、保育作業がほとんど入らない状態であった。これが樟子松の特徴ならば乾燥に強い樹種として注目に値する。

今後の管理の問題だが、木材生産林的な発想で、森林造

成がなされているわけではないと思う。当然当地の干害防止・防風効果・飛砂防備などの多面的な機能が発揮できる保護林的な森林に仕立てて行くと思われる。

日本の場合、単層林的施業から複層林的施業の見直しが進められている。単一樹種による大面積の造林は病害虫や気象災害の危険性を増大させ、生態的な健全性に対する問題が危惧されていたからである。本来の森林が天然更新を回復するまでには、100年以上の歳月がかかると言われている。人工的にその様な森林が出来るのか、注目されている。複層林や多樹種からなる混合林に仕立てて欲しい。

プロジェクトの成果が出てくるまでには、間伐や気象災害など様々な困難を乗り越えなければ成らない。その第1歩が苗木を植栽することで有り、活着率を向上させる事である。

長い年月がかかるが目指す森林が出来るまでには相当の年数をようすることになる。植栽した苗木をしっかりと管理し努力を重ねてもらいたい。

(森林・林業調査研究所北見支部 事業部長)

IFCC 実施植林事業一覧

プロジェクト名：事業実施期間、本数、面積	樹種
寧夏紅寺堡生態緑化プロジェクト 2002年度～2004年度 3カ年 ●本数と面積：582,420本 380ha	ポプラ、アカシア、神樹、ナツメ、トネリコ、ヤナギ、コマツナギ
寧夏・日中青年平羅県生態緑化林事業 2004年度～2006年度 3カ年 ●本数と面積：1,275,200本 290ha	紫穂槐、河柳、トネリコ、ナツメ
日中青年寧夏中衛生態緑化モデル林事業 2005年度～2007年度 3カ年 ●本数と面積：1,065,400本 300ha	臭椿、新疆楊、紫穂槐、ナツメ、沙棗、檉条、アカシヤ、寧条苗、花棒
日中青年銀川生態緑化林事業 2007年度～2009年度 3カ年 ●本数と面積：395,480本 180ha	コノテガシワ、国槐、新疆楊、臭椿、山桃、ホソグミ、紫穂槐、毛条、ニセアカシア、沙棗、山杏、互葉醉魚草、杜梨緑籬、樟子松、ツバキ
日中青年石嘴山生態緑化林事業 2007年度～2009年度 3カ年 ●本数と面積：271,300本 182ha	沙棗、白蠟、国槐、ニワウルシ(臭椿)、ニセアカシア、胡楊、紅柳、火炬、早柳、砂棗、コマツナギ(紫穂槐)
寧夏中寧県日中青年生態緑化モデル林事業 2008年度～2010年度 3カ年 ●本数と面積：269,000本 300ha	新疆ポプラ、エンジュ、柳、トネリコ、ニワウルシ、リンゴ、クコ
寧夏呉忠市太陽山開発区日中青年生態緑化モデル林事業 2010年度～2012年度 3カ年 ●本数と面積：1,744,400本 210ha	ニセアカシア、新疆楊、紅柳
日中青年石嘴山市惠農区生態緑化モデル林事業 2010年度～2012年度 3カ年 ●本数と面積：1,090,000本 220ha	沙棗、沙柳、紫穂槐、紅柳 ※黄河氾濫で破損
日中青年河北遷西県生態防護林 2011年度～2013年度 3カ年 ●本数と面積：370,000本 157ha	側柏、タイマツ、栗、山杏樹、
日中青年寧夏固原市生態緑化モデル林 2014年度～2018年度 5カ年 ●本数と面積：129,300本、136ha	雲杉、山桃、旱柳、ライラック、レンギョウ、油松、樟子松
蒙京津冀青少年生態緑化モデル林プロジェクト 2014年度～2018年度 5カ年 ●本数と面積：267,750本、165ha	樟子松
中日青年灤河源生態緑化モデル林事業 2014年度～2018年度 5カ年 ●本数と面積：417,000本 200ha	樟子松、雲杉
2018年度(～2019年10月)終了時 ●総本数と面積：7,877,250本(累積) 2,780ha(累積)	

2002年～2019年

中国植林緑化活動協力事業

寧夏回族自治区・河北省遷西県・内モンゴルシリングル盟での事業実施図

